

A. コースワークの充実・強化

⑤他分野の大学院生との共同研究の実施

●首都大学東京 理工学研究科数理情報科学専攻

「理工横断型人材育成システムの再構築」の事例 <理工農系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

大学院共通科目として「数電機連携・横断プロジェクト1、2」を新設し、理工教員間の連携プロジェクトに学生が参加する形態をとる「連携プロジェクト」と理工学生間の自主的なグループ形成による「横断プロジェクト」の推進を支援した。特に、理工交流の実質的展開を狙い、理学と工学という基盤が異なる学生からなるグループによる横断プロジェクトの推進を行った部分については、学生間の自発的テーマ形成はとても困難であった。

苦勞したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

学生個々がそれぞれの修士論文や博士論文のテーマを抱えながら、しかも各専攻カリキュラムは変更ないままで、別途、他分野の学生間で共通のプロジェクトテーマを持ってそちらに時間を取られることは、かなり負担に感じることになるという問題点がやはりある。その中で、意欲的な学生に対して、興味関心を持って取り組めるような適切なプロジェクト例の提示をすることがなかなか困難であった。特に、学生間が自主的にテーマ設定しやすい状況を提供する体制ができなかったと言える。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

- ・連携プロジェクトへの参加学生からは、充実して活動に取り組めたとの感想もあり、まずは、教員連携での連携プロジェクトへの参加から始めて、自然に学生間の自主的プロジェクトへと発展するという流れができるとよいと思っている。
- ・さらに学生間が自主的にテーマ設定しやすいよう、他大学での同種のプロジェクト実施例などを紹介したり、教員からのテーマ案募集などを試みる方向で検討中である。

●徳島大学 医科学教育部医学専攻

「医療系クラスターによる組織的大学院教育」の事例 <医療系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

各教育クラスター単位でクラスターミニトリート（1泊2日の研究交流合宿）

を開催し、大学院生同士の交流の場を持つことで、研究交流を促した。一方、日常的な研究活動における相互交流の活性化には課題が残った。

苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

所属大学院組織が異なる大学院生が、日常的に交流できる場が少ないため、リトリート以外での研究交流の活性化に課題が残った。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

ミニリトリートをきっかけとして10件の共同研究が新たに開始された。この共同研究のその後の進捗状況について、発表会を設けたり、研究費助成を行えば、共同研究の促進につながったと考えられる。